

# 日本における子の性別と離婚との関係

## Sex Composition of Children and Divorce in Japan

犬飼 直彦（早稲田大学・院）

INUKAI Naohiko (Graduate School, Waseda University)

inukainaohiko@gmail.com

### 背景

子の性別は離婚の関連要因の一つとされている。1980年代の米国の研究等では、子が男子である場合、女子である場合よりも離婚確率が低いことが示されており、このような子の性別と離婚との関係は、子に対する親の性別選好等によって解釈されている。しかし、より新しい研究の中には、同一地域における子の性別と離婚との関係が変化していることを示すものもあり、社会のジェンダー平等が高まったこと等、社会のあり方の変化との関連が示唆されている。

日本における子の性別と離婚との関係については、安藏伸治が「子どもが男児の場合には、男性の離婚が大きく抑止される」こと等を指摘しているが、子の性別と離婚との関係の変化には触れていない。

### 目的

本報告では、日本における子の性別と離婚との関係の変化を示し、検討する。

### 方法

幅広い年齢層の男女の婚姻暦がデータとして得られる日本版総合的社会調査（Japanese General Social Surveys: JGSS）の2000年分、2001年分、および2002年分の個票データの二次分析を行う。婚姻を経験し、かつ1人以上の子がある男女を分析対象とし、これを出生年によって3分割（1944年以前、1945年から1959年、および1960年以降）して、分析する。モデルは、初婚、かつ第1子の出生以降15年以内の期間における離婚についての離散時間ロジットモデルである。

### 結果

表1にモデルの推定結果を示す。モデル1が分析に用いたモデルである。モデル2は、モデル1から子の性別に関する独立変数を除いたものであり、比較のために示している。

1945年から1959年の出生コーホートでは、各時点における最年少の子（ただし第3子までの子）※が男子である場合、最年少の子が女子である場合よりも、離婚を経験する確率が有意に低い。一方、1944年以前の出生コーホートおよび1960年以降の出生コーホートでは、最年少の子の性別と離婚との間に有意な関係はない。

※ 各時点における最年少の子とは、たとえば子が1人である期間については第1子、子が3人である期間については第3子である。

表1 離婚についての離散時間ロジットモデルの推定結果

	1944年以前出生		1945年～1959年出生		1960年以降出生	
	モデル1	モデル2	モデル1	モデル2	モデル1	モデル2
第1子出生からの年数	0.320*	0.321*	0.424***	0.422***	0.500**	0.496**
同2乗	-0.019*	-0.019*	-0.026**	-0.026**	-0.026*	-0.026*
子が2人	-0.619*	-0.627*	-1.454***	-1.438***	-0.562†	-0.547
子が3人	-1.753**	-1.755**	-1.385***	-1.374***	-0.629	-0.609
子が4人以上	-0.529	-0.457	-0.411	-0.673	-0.385	-0.55
子が3人以内、かつ 最年少の子が女子 (定数)	-0.167		0.494*		0.341	
	-7.130***	-7.208***	-6.709***	-6.445***	-6.690***	-6.504***
赤池情報量基準(AIC)	876.8	875.1	1036.2	1038.7	716.5	716.1
離婚件数	57	57	76	76	59	59
観測数(人・年)	46,072	46,072	30,239	30,239	9,484	9,484
分析対象者数	3,192	3,192	2,128	2,128	1,182	1,182

JGSS-2000、JGSS-2001、およびJGSS-2002の個票データをもとに作成

\*\*\*、\*\*、\*、†は、それぞれ0.1%水準、1%水準、5%水準、10%水準で有意であることを示す。

## 考察・結論

1945年から1959年の出生コーホートでは、最年少の子の性別により、離婚を経験する確率が有意に異なる。一方、他の2つの出生コーホートでは、最年少の子の性別と離婚との間に有意な関係がない。統計的に有意でないことは、子の性別と離婚との関係がないことをただちに意味するものではないが、3つの出生コーホートの間に見られる差は、日本においても子の性別と離婚との関係が変化している可能性を示唆するものである。

1944年以前の出生コーホートと1945年から1959年の出生コーホートとの間の差については、落合恵美子が「家族の戦後体制」と呼ぶ、戦後の人口学的条件に支えられた近代家族の大衆化との関連があるように思われる。子に対して強い愛情と教育関心を注ぐのが近代家族の特徴のひとつである。子に対する夫婦の責任が重くなった結果、子の性別と離婚との関係が強まった、ということが考えられるだろう。

1945年から1959年の出生コーホートと1960年以降の出生コーホートとの間の差については、子に対する親の性別選好の変化が反映している可能性がある。男子に対する選好が薄れるとともに、子の性別と離婚との関係が弱くなっていることが考えられるだろう。

## 謝辞

日本版General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて(1999-2003年度)、東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである(研究代表: 谷岡一郎・仁田道夫、代表幹事: 佐藤博樹・岩井紀子、事務局長: 大澤美苗)。東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターがデータの作成と配布を行っている。